

第63回(2019年度) 北海道開発技術研究発表会論文

道の駅「北オホーツクはまとんべつ」における 官民協働による取組

一子育て応援施設

「おむつと液体ミルクを販売する自販機」の設置一

稚内開発建設部 道路計画課

○高野 進

浜頓別町役場産業振興課商工観光係

青海 玲

北海道コカ・コーラボトリング株式会社広報・CSR推進部 皆川 和也

国土交通省では、道の駅の子育て応援施設整備として、24時間利用可能なベビーコーナーの設置、妊婦向け屋根付き優先駐車スペースの確保、おむつのばら売りなどの取組を進めている。令和元年5月1日にオープンした道の駅「北オホーツクはまとんべつ」には、道内初となる「おむつや液体ミルクを販売する自販機」が設置された。

本発表では、官民協働による自販機設置の経緯、調整事項及び設置後の状況などを報告する。

キーワード：道の駅、官民協働、子育て応援、液体ミルク

1. はじめに

世界に先駆けて少子高齢社会を迎えた我が国において、子育て世代を応援する施策を推進していくことが非常に重要であることから、国土交通省では、平成30年9月28日に高速道路のサービスエリアや「道の駅」における子育て応援施設の整備を速やかに実施する取組方針を示し、平成30年11月に子育て応援施設の設置を道の駅の整備要件とした。

「道の駅」における子育て応援の取組方針 (H30.9)

【重点整備箇所】

- ・全国の高速道路のサービスエリア
- ・国が整備した「道の駅」
(以下、「直轄一体型「道の駅」」という)

【整備目的】

(1) 基本的な機能

- ① 24時間利用可能なベビーコーナーの設置
- ② 妊婦向け屋根付き優先駐車スペースの確保
- ③ おむつのばら売り
- ④ 施設情報の提供

- ・概ね3年以内にすべての箇所の整備を完了
- ・対応可能なところについては、速やかに実施
- ・今後、新たに整備する箇所については標準装備

(2) 更なる機能改善

- ・子供用トイレやキッズスペースなど、先進事例を共有しながら順次整備を進める

※重点整備箇所以外的高速道路のパーキングエリアや地方が整備した「道の駅」についても、高速道路会社や地方自治体と連携してニーズの高い箇所から優先的に実施

北海道開発局においても国土交通省の方針が示されてから概ね3年以内に、直轄一体型「道の駅」での子育て応援施設の整備完了を目指し、取り組んでいる。

令和元年初日となる2019年5月1日に浜頓別町にオープンした道の駅「北オホーツクはまとんべつ」では、「道の駅」を利用する子育て世代が、24時間いつでも利用可能となる授乳室やおむつ交換スペースを整備しているほか、外出先で「おむつ」や「液体ミルク」を購入できるよう、官民協働による仕組みを活用し、北海道で初めてとなる「おむつと液体ミルクを販売する自販機」を設置している(写真-1)。



写真-1 おむつと液体ミルクを販売する自販機

2. 道の駅「北オホーツクはまとんべつ」の紹介

浜頓別町は、宗谷地方東部に位置しており、町内には国内最北のラムサール条約指定地で日本とロシアを渡る水鳥達の重要な中継地であるクッチャロ湖がある。

浜頓別町中心部は札幌市と浜頓別町を結ぶ国道275号、網走市と稚内市を結ぶ国道238号、さらには日本海とオホーツク海を結ぶ道道豊富浜頓別線が集まる交通の要所となっており、道の駅は当該箇所に整備された(図-1)。

このような土地の利を生かし、道の駅には、路線バスや都市間バス、さらにはデマンドバスも乗り入れることで、交通結節点の機能を有しており、利用者の利便性向上や町内外の交流人口の拡大に繋がっている(写真-2)。

また、子育て応援施設としては、24時間利用可能な授乳室やおむつ交換スペースの他、幼児が遊べるキッズコーナーや小学生までが遊べる大型遊具コーナー(あそびの広場)が備わっており、館内は子供達の笑い声で賑やかであるとともに、あそびの広場のすぐ隣は、くつろぎスペース(多目的ホール)が整備され、子供たちを見守りながら親子で過ごすことができる環境が整っている(写真-3)。



図-1 道の駅「北オホーツクはまとんべつ」位置図



写真-2 道の駅「北オホーツクはまとんべつ」外観



写真-3 「あそびの広場」で遊ぶ子供たち

3. 「24時間利用可能なベビーコーナー」の課題と対応方針

北海道開発局では、24時間利用可能なベビーコーナーは調乳可能な施設の設置を基本としている。

積雪寒冷地である北海道において、深夜のベビーコーナーの利用に関しては、利用者ニーズを踏まえ様々な議論が交わされた。また、子育て経験のある職員やその家族、産科の看護師の意見も聴取した上で、対応方針を決定した。

(聴取した意見)

- 母乳による授乳の場合、車内で授乳の方が良い
- 寒い場所で授乳は出来ないため冷暖房施設が必要
- 車を降りて施設を利用するのは調乳が必要な方

しかし、調乳にはWHO(世界保健機構)の基準で、70度以上のお湯を提供する必要がある。これは、粉ミルクから調乳した際の菌の発生を抑制するためである。

また、水道水に含まれる成分によっては一般的に、一度、煮沸させる必要がある。

さらに、粉ミルクを調乳した後に飲める温度に冷やすための水道とシンクの設備も必要となる。

これらの設備の設置に関しては以下の課題があった。

- 調乳用の市販の電気ポットなどは、防犯上、夜間に無人となる場所での設置は難しい
- 調乳用のお湯の製造器は高額である
- 飲料用ボトル温冷水はランニングコストが必要である

これらの課題に対して、北海道開発局と協働事業の実施に関する基本協定を締結している北海道コカ・コーラボトリング(株)の間で、道の駅に設置している自動販売機を活用し、調乳機能を満足させることができないか検討を重ねた。しかし、様々な課題が見えてきた。

- 汎用自動販売機は75度という高温での提供が出来ない
- 高温に耐えられる飲料水の容器がない

これらの課題から、自動販売機でおむつと当時発売が見込まれていた液体ミルクを販売する方法が最良であるという結論に至った。

「道の駅」における自動販売機の設置は、競争入札制度を導入している自治体が多く、特定のメーカーの飲料自動販売機をベビーコーナーへ設置することは難しかった。

そこで、子育て応援自動販売機を別途、独立して設置するという、新たなスキームを構築した。

4. 子育て応援自販機の導入

(1) 「子育て応援自販機」の導入スキーム

現在、道の駅では、前述で触れている北海道開発局と北海道コカ・コーラボトリング（株）の基本協定を踏まえ、「道の駅」の設置者である市町村、電光掲示板付き自動販売機の設置者である北海道コカ・コーラボトリング（株）、それに北海道開発局の3者が連携した情報提供・災害対応のサービス「おしらせ道ねっと」を展開している。

「おしらせ道ねっと」では、①地域情報、道路情報の提供、②非常時の自販機商品の無償提供を行なっている（図-2）。

①地域情報、道路情報の提供



○情報がサイクルで発信
(時計⇒各自入力⇒自治ニュース⇒時計の順)

○各自入力のメッセージは、観光情報や道路情報、災害情報

☆☆ようこそ！『道の駅〇〇〇〇〇』へ！！☆☆

〇月〇日(〇)午前〇時『●●町●●まつり』

②非常時の自販機商品の無償提供



○非常時には無償で飲料水が提供できる仕組み

○いざという時に備え、防災訓練で運用してみることが重要

道の駅「上ノ国もんじゅ」防災訓練時
出典：上ノ国町HP

図-2 「おしらせ道ねっと」の取組内容

当該道の駅では、「おしらせ道ねっと」のサービスに加え、新たに「③子育て応援の推進」に関する協働事業として「子育て応援自販機」の設置に関する内容も3者の協定内容に盛り込むことで調整を図った。

具体的には、北海道コカ・コーラボトリング（株）が提供する「子育て応援自販機」を道の駅設置者に無償で貸し出すというものである。前述のとおり、「子育て応援自販機」は、道の駅に設置されている飲料用自動販売

機とは別のおむつ等の販売を専用とした自販機である。

北海道コカ・コーラボトリング（株）が、子育て応援自販機の設置・撤去や故障時、機材無償メンテナンスを行い、道の駅管理者は、商品管理（商品の仕入れ・補充など）、通常時の維持管理（電気代 など）を行うものとしている（図-3）。電気代においては、販売商品が、すべて常温のものであることから、そのコストは飲料用自販機と比較して軽微なものとなる。

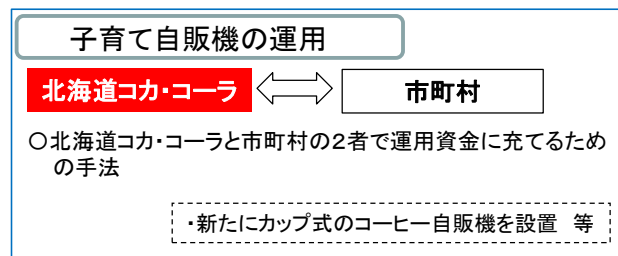
子育て応援自販機本体のサイズは、横幅614mm、奥行817mm、高さ1,830mmとなっている。



図-3 「子育て応援自販機」導入のスキーム

また、子育て応援自販機の維持管理費用は、北海道コカ・コーラボトリング（株）と道の駅設置者である浜頓別町の2者で運用資金に充てるための手法を検討した結果、北海道コカ・コーラボトリング（株）が、浜頓別町役場内に、新たにカップ式のコーヒー自販機を設置し、その収益を「子育て応援自販機」の維持管理費用に充てるという方法となった（図-4）。

その結果、おむつのばら売りについて、道の駅スタッフの負担が軽減できる上に、利用者に24時間提供できるビジネスモデルを整えることができた。



を進めていたことから、計画段階において、24時間利用可能な授乳室が未整備だった。

改善策としては、2カ所あった多目的トイレのうち、1カ所を授乳室として再構築し、授乳スペースを確保したものの、シンク等を整備することが出来なかった。

また授乳室のピクトグラムを道の駅施設内に表示し、授乳室までの誘導経路を示すとともに、「子育て応援自販機」は、利用者の利便性に配慮すべきとの理由から、授乳室手前に設置する計画とした（写真-4）。



写真4 授乳室とその前に設置した子育て応援自販機

(3) 乳児用液体ミルクの販売

液体ミルクの国内販売の背景には、2016年に駐日フィンランド大使館が液体ミルクを熊本地震の被災地に救援物資として送ったことがきっかけとなり、液体ミルクの災害時における有用性を認める声が高まったことがある。

一方、2018年の北海道胆振東部地震においては、フィンランド製の液体ミルクが被災地に送られたが、国内で液体ミルクの使用例がないなどの理由から、災害者に液体ミルクを有効に提供することが出来なかったという報道もあった。

これらの災害を契機に国内でも議論が進み、「乳等省令」と「食品、添加物等の規格基準」が改正され、液体ミルクの製造基準や成分規格などが定められ、国内での製造と販売が可能になった。

当該道の駅に再構築した授乳室には、シンク等が未整備だったことから、協定を締結している3者で、さらに議論を重ね、「子育て応援自販機」の商品ラインナップに液体ミルクを加えることにより、授乳室にシンクがないという課題を解決した。

液体ミルクは、常温保存が可能で開封後すぐに飲めるという製品であり、授乳室で粉ミルクをお湯や水で溶かす必要がなく、液体ミルクを哺乳瓶に移し替えればそのまま、乳児に飲ませることができるものである。

液体ミルクの販売にあたっては、検討時に日本で唯一、一般発売を開始していた江崎グリコ（株）の協力を得ることで、商品ラインナップに加えることができた（写真-5）。

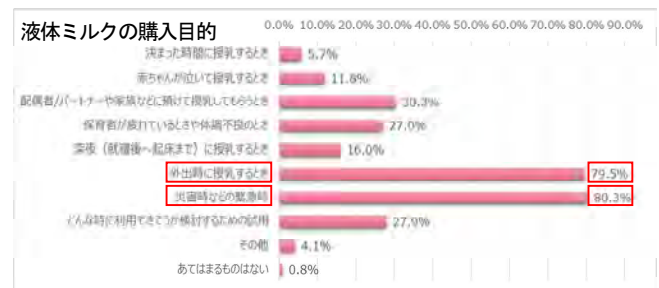


写真5 自販機で販売中の液体ミルク「アイクレオ」



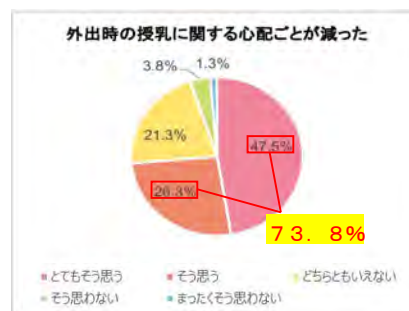
子育て世代が外出する場合、おむつや液体ミルクの準備でどうしても荷物が多くなる。液体ミルクの利点は、おでかけの準備や荷物がぐっと減り、子育て世代の外出機会の創出に繋がることが期待できることや、お湯の確保が難しい災害発生時でも使用可能なことから、災害時の備蓄品として活用できることから、道の駅での販売は有用なものである。

実際に液体ミルクの販売メーカーである江崎グリコ（株）が行った発売後のアンケート調査では、液体ミルクの購入目的として、「外出時に授乳するとき」が79.5%、「外出時の授乳に関する心配ごとが減った」という問いには『とてもそう思う』『そう思う』が合わせて73.8%と子育て世代の外出時における液体ミルクの必要性が高い結果となっている（図-5、図-6）。



（出典：江崎グリコ（株）調査リリース（2019年4月24日））

図-5 液体ミルクの購入目的

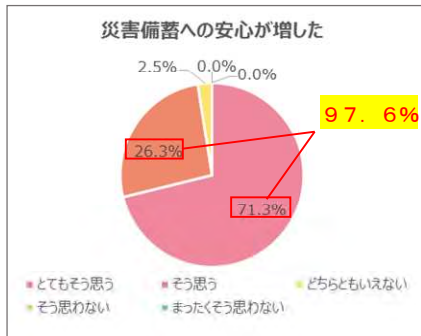


（出典：江崎グリコ（株）調査リリース（2019年4月24日））

図-6 外出時の液体ミルクの必要性

さらに図-5に示した調査結果では、液体ミルクの購入目的として「災害時などの緊急時」が80.3%と高く、

「災害備蓄への安心感が増したか」という問いにも『とてもそう思う』『そう思う』が合わせて97.6%と非常に高い数字を示しており、災害に備え、液体ミルクを備蓄しておくことの重要性は高いと言える（図-7）。



（出典：江崎グリコ（株）調査リリース（2019年4月24日））

図-7 災害時の液体ミルクの必要性

また最近では、液体ミルクを哺乳瓶に移し替えることなく、吸い口を紙パックに装着してすぐに授乳できる商品が販売され、災害時の備えや日常使いといった液体ミルクの様々なシーンでの活用が期待できる（写真-6）。

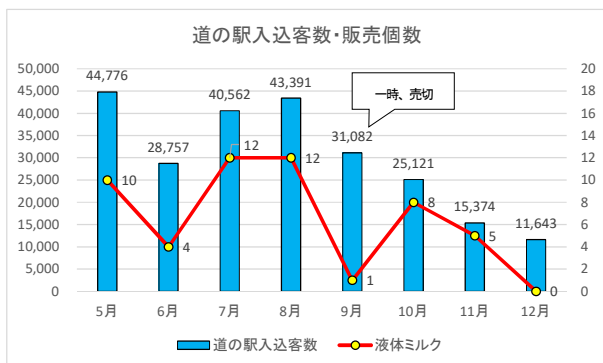


写真-6 紙パックに装着する吸い口商品「チュチュ 紙パック用乳首」

5. 液体ミルクの販売状況及び活用方法

道の駅オープンから、液体ミルクの販売は好調である。令和元年12月末までの道の駅利用者は、約24万人おり、その間、液体ミルク52個の販売実績があった。

液体ミルクは、道の駅の入込客数が多い夏場に最も多く売れたが、観光シーズンを過ぎてからも継続して販売実績があり、液体ミルクの認知度が上がってきたことがその要因ではないかと考える（図-7）。



出典：浜頓別町役場聞き取り（令和元年12月末現在）

図-7 道の駅入込客数と液体ミルクの販売実績

利用者の声としては、「自動販売機があることで、おむつ切れ等の心配が無く、とても安心感がある」、「幼児スペース等で遊ばせている時に不足しても、外に購入しに行かなくて良い」、「ドラッグストアが閉まった後でもいざという時に買いに来れる」、「地震が起こっても、ここに来ればミルクが買えるのが安心」などの意見が寄せられ、道の駅を利用する子育て世代に大変好評を得ている。

道の駅設置者である浜頓別町からも、「利用者に24時間提供できるため、道の駅のサービス向上にも繋がる」と好評である。

また道の駅でストックされた液体ミルクは、日常においては、子育て応援として販売したり、地域の病院や子育て応援施設、防災訓練等に活用し、その認知度や使用方法を伝えるとともに、災害時には、防災備蓄として活用できるように取り組んでいくことが重要と考える。

6. おわりに

道の駅の駅長でもある菅原信男浜頓別町長は、「自販機で販売しているおむつや液体ミルクが予想以上に売れており、とても驚いている。子育て応援施設としての機能も充実しており、お子様連れでも安心して立ち寄れる施設となっている。ぜひ家族連れで遊びに来ていただき、町のことを知ってもらいたい。」と期待を寄せている。

国土交通省から、地方創生と観光を加速させることを目的とした「道の駅」第3ステージとして、令和元年11月8日に『新「道の駅」あり方検討会提言』が示された。その中には、地域の防災計画に基づいた災害時の機能確保や地域の子育てを応援する施設の併設に関する内容が記載され、子育て世代の安全と安心を応援する体制が着実に構築されている。

そのような背景の中、道の駅「北オホーツクはまどんべつ」において、浜頓別町、北海道ココ・コーラボトリング（株）、北海道開発局稚内開発建設部との協働事業として、北海道で初めて「24時間おむつと液体ミルクを提供できる自販機」を設置した取り組みは、先進的なものであり、道内各地の道の駅で子育て応援自販機の導入が進められている。

引き続き、子育て応援施策に加え、道の駅に求められる機能についても、道の駅関係者の協力を得ながら対応し、地域に貢献できるよう取り組んでいきたい。

謝辞：本取組を遂行する上で、江崎グリコ（株）に多大なるご尽力をいただきました。ここに感謝の意を表します。